



■ 保健環境研究センター10月だより  
 ～定点把握対象疾患の話：無菌性髄膜炎について～



無菌性髄膜炎は細菌以外の病原体による髄膜炎のことを指します。原因となる病原体はウイルスから線虫までバラエティに富みますが、ほとんどは髄液にウイルスが侵入することで引き起こされるウイルス性の感染症です。この疾患は感染症法の五類定点把握対象で、発熱、頭痛、嘔吐の三大主徴がみられることや髄液所見、病原体検査などから診断されます。奈良県では基幹定点病院で患者の発生報告や検体採取を行い、保健環境研究センターで病原体検出をすることで流行状況を監視しています。



代表的な原因ウイルスとして、おたふくかぜを起こすムンプスウイルスやエンテロウイルス（コクサッキーA群：CA、コクサッキーB群：CB、エコー：E、エンテロ：EVなどピコルナウイルス科の腸管で増殖するRNAウイルスの総称）があります。無菌性髄膜炎の約85%はエンテロウイルスによるものと言われており、夏季に子どもの間でしばしば流行します。奈良県で2005年から2010年にかけて採取された検体からは11種類のウイルスが検出され、うち10種類がエンテロウイルスの仲間でした（表）。今年も、手足口病の主原因でもあったエンテロウイルス71型（EV71）が検出されています。

ウイルス性髄膜炎の予後は概ね良好とはいえ、まれに合併症や後遺症も起こりますのでやはり予防は大切です。ムンプスはワクチンによる予防が有効ですが、エンテロウイルスには今のところワクチンがないうえ、上記のように多種類の病原体があることから何度も感染する可能性があります。これらの感染経路は主に糞便からの経口感染や飛沫感染と考えられます。他の感染症予防にもなりますので手洗いやうがいを習慣づけ、流行期には患者との接触を避けるようにしてください。

表. 奈良県で無菌性髄膜炎患者検体から検出されたウイルス（2005-2010）

年\ウイルス	CA9	CB2	CB3	CB5	E3	E6	E18	E25	E30	EV71	ムンプス
2005			4		1						1
2006	3						3	1			3
2007				20			1	1	1		
2008				9					2		
2009				1							
2010		1				1		1		3	

—基幹定点病院の先生方へ—

本疾患の患者を診断された場合、髄液とあわせて便、咽頭ぬぐい液を採取してご提出いただくと、ウイルス検出率の向上が期待できます。ご協力くださいますようお願い申し上げます。

（ウイルスチーム 井上 記）

平成22年 奈良県保健環境センター10月だより